

## はじめに

この本を手にとってくださいました方は、きっと何らかの形で幼稚園、保育園、子育てに関わりのある方なのだろうと思います。子育てをされている保護者かもしれないし、仕事として子どもたちと関わっている保育者かもしれません。あるいは経営者、研究者、または純粹に個人として、子どものことに関心をお持ちなのかもしれません。きっとご縁があつて、この本を開いてくださったと思いますので、最初に、この本がどういう本なのか、一種の自己紹介をしておきたいと思っています。

この本は、私たちの幼稚園についての本です。この本を書いた動機は三つあります。

## 第一の動機——私たちが何者？

一つは、——これが一番切実な動機ですが——、私たちが何者なんだろうということを見つめ直したかったということです。私たちの幼稚園は昨年が創立四十五周年でした。これまで私たちはどんなことを考え、どんな思いでどんな保育を行なってきたのかを振り返りたいと思いました。そうやって、私たちはどんな幼稚園なのかを教職員が一緒になつて考えたかったです。

人間でも、四十代も半ばになると、自分はどう生きてきたのか、自分の人生に興味なんてあつたんだろうかと考えてしまうことがあるのではないのでしょうか？ いきなり暗い話で恐縮ですが、私たちの幼稚園も園児の減少が進み、いわば存続の危機に瀕しています。こういうとき、園舎を建て替えたり、目玉となる教育法などを取り入れたりすることもあるかと思いますが、まずは、自分たちはなぜこの地域に、こうして存在しているのだろうということをしっかり見つめたいと思うのです。

コロナ禍に入ってから、再び自殺者が増加しているといえます。とくに女性の自殺率が倍増したそうです。今、多くの方が生活に困難を感じ、生きる意志を奮い立たせようとしているのではないでしょうか。そんな中で、人生を振り返り、自分はよくやってきた。間違いや失敗も、傷つくこともたくさんあったけれど、それでもこうやって生きていられるだけで大したものじゃないか。きつとこれからも生きていけるよ、と自分を受けとめ、励ますことは、自分だけじゃなくて、自分とともにいる子どもたちのために必要なことだと思います。

幼稚園も同じだと思うのです。特に、幼稚園は責任をもってお子さんたちを預かるところです。そこで働いている人たちが、自分たちは何者なのか、何を目指して努力しているのかを見失ってしまつては、責任ある保育はできないと思います。だから、この本は第一に、幼稚園としての自己肯定の試みです。その試みが単なる自己満足に終わるのではなく、同じ時代を生きている保護者や保育者の方々につながるものであることを願っています。

## 第二の動機 ——そもそも幼稚園ってなに？

もう一つの動機は、幼稚園とは何か、ということを考えてきたということです。幼稚園も、保育園も、それぞれ歴史は百年以上も前の明治期にさかのぼります。保育園は、親が仕事や健康などの理由で自分で保育ができない期間、子どもを預かる施設として続いてきたと思います。幼稚園は、親の選択によって、いわば小学校に上がるまでの期間、幼児教育を行う場として理解されてきました。だから、保育園は厚生労働省の、幼稚園は文部科学省の管轄下にありました。それが認定子ども園や無償化への流れの中で統合されつつあります。その流れに反対なのではないのですが、この統合が幼稚園や保育園の中から起こったのではなく、いわば「上」から、政治や行政の思惑として進められたことに疑問を感じています。幼稚園の多くは園児が減少し、その一方で保育園では待機児童の問題が一向に解消されない状況で、この二つを統合して、できるだけ多くの子どもたちを受け入れようとするのは当然と思われるかもしれません。でも、幼稚園の多くは私立幼稚園という、学校法人によって運営されています。私学の特徴は、文科省の指導要領

を踏まえながらも、独自の考え方に基づいて特色ある教育を行えることです。だから、幼稚園は、親が選択するのです。もちろん、保育園でも特色ある保育が行われていて、素晴らしい園がたくさんあります。ただ、基本的に、親はこの保育園に行きたいと希望を出すことはできても、必ずそこに入園できるわけではありません。

私は、これは幼稚園や保育園のアイデンティティーに関わることだと思っています。以前、保育ジャーナリストの猪熊弘子さんの講演を聞いていたとき、「保育園と幼稚園は違う文化だ」と言われていたのを覚えています。その文化の違いが生まれる背景として、保育園は地域のすべての子どもたちに開かれていること、幼稚園は親を選んで子どもを通わせるところという違いは大きく作用していると思います。そして、もう一つの背景として、幼稚園の方が、保育園と比べて家族経営、同族経営の色合いが濃いということがあるように思います。

私の場合も、この本の中で少し触れますが、御多分に洩れず、祖母、母から引き継ぐ形で園長になったのですが、事情があつて幼稚園の経営に家族は関わっていません。そのことが、教職員や地元の人たちにも不安を与えることもあるようです。家族ぐるみで運営に携わったほうが信頼

が増すというのもよくわかります。しかし、私はこの幼稚園の園長に就任するとき、学校法人とは公益法人なのだということを強く意識しました。創立者は私の祖母ですが、彼女がこの土地と建物、いわば自分の財産の一部を公共に寄付することによって、この幼稚園を経営する学校法人が設立されました。その時点から、この幼稚園もその財産も私物ではなく、公共のものとなったのです。だからこそ、国民からの税金が補助金として与えられます。法人には、理事会があり、評議員会があつて、幼稚園や学校の運営を見守り、意思決定をしています。つまり、本来は血のつながりではなく、「建学の精神」のような理念が経営者と教職員に受け継がれ、さらには進化・発展していくはずなのです。

個人的な感覚でいうと、今、明治期から続いている「幼稚園」という制度そのものが存続の危機にあるような気がします。特に、最近の私立幼稚園連合会による数億円もの会費の使い込みが発覚してからは、その思いを強くしています。それだけのお金を個人が使ったのか、それとも何らかの政治的な目的のために使われたのか、まだ真実は明らかにされていませんが、社会には今後、幼稚園は何のために存在しているのかという疑問が広がっていくのではないかと感じていま

す。もし時代の流れがそうなのであれば、幼稚園が変容していくこと、子ども園やその他の形態に移行していくことはやむを得ないかもしれません。でも、そのときは、自分たちは何を目指してここまでやってきたのか、何を後世に受け渡したいのかを意識しておきたいと思えます。そうでなければ、状況に流され、自分を見失うということにしかならないかもしれません。

だから、この本を書くことで、幼稚園とは何かということも考えたいのです。それはどこか日本に生まれた人が、日本人って何だろう、ここはどういう国なのだろうかと考えるのと似ているような気がします。

### 第三の動機——シユタイナー教育への関わり方

そこに第三の動機があります。国や文化に関わる場所です。私たちの幼稚園は、創立からしばらくして、シユタイナー幼児教育を取り入れました。おそらく日本で最初のシユタイナー幼稚園と言つてよいかと思えます。ドイツの「シユタイナー幼稚園連盟」にも加盟し、長いこと「シユタイナー幼稚園」を名乗ってきました。しかし、私が園長に就任してからは、教職員と話し合

い、「シユタイナー幼稚園」という名称を使わないことに決めました。それは経営者が方針を決め、その方針に沿って「シユタイナー教育」を行うというのは、そもそもシユタイナー教育の理念とは合致しないと思つたからです。本来、すべての教育がそうだと思いますが、教育とは一人ひとりの個人の内にある可能性が育ち、発揮されるための環境を用意し、条件を整えることです。そのような教育に携わる保育者や教師が、「上」から示された方針に沿って動くことで、子どもたちの主体性が支えられるはずありません。

シユタイナー教育はドイツから（創始者のシユタイナーはオーストリアの人でしたが）もたらされました。今、世界中に数多くのシユタイナー幼稚園やシユタイナー学校がありますが、そこで問われているのは、それぞれの地域の文化や社会状況の中から、どのように新しいもの、独自のものが生まれてくるのか、シユタイナー教育はそこでどのように作用できるのか、ということです。いわば帝国主義時代の植民地政策のように、同じような建物と保育室が世界中に広がることで健全なはずありません。四十年近く前にシユタイナー教育という海外の教育法と出会つた私たちの幼稚園が、それをどのように実践し、どのような手応えを得てきたのか。また、創立以



来、ずっと続いてきた日本舞踊の先生による「お扇子」の授業とどのようにつながるのか。地域の人々の感性とどう響き合ってきたのか。そのような問いの中から、やや大袈裟な言い方をすれば、西洋と東洋、異なる文化の出会いや、そこから独自の新しいものが発生する可能性に目を向けることができると思いました。それはそのまま、この幼稚園のこれからの方向を見つめることにつながると思います。

以上の三つの動機から、この本は書かれました。園長としては教職員にインタビューを重ね、これまでに積み重ねられてきた保育の経験や考え方を言葉にするように努めました。主な手遊びや歌の楽譜も巻末に付録として添えました。また、創立以来、この幼稚園に関わってくださっている花柳和先生へのインタビュは、彼女を通して、創立者の思いが伝わってくるように感じました。この幼稚園に関わってきてくれた人々との対話から生まれたこの本が、次世代に手渡すバトンとなり、ご家庭や保育現場での話し合いに何らかの形でつながっていけば、とても嬉しいです。